

「よく来てくれたね、エリサ。君みたいな子が私の娘になってくれるなんて嬉しいよ」

黒の軍服に身を包んだ男は、威圧感を覚えるほど大きかった。生地がぴたりと筋肉に張り付き、体格は騎士らしくがっちりしている。

頭には白虎の丸い耳があり、背後では太い尻尾が揺れていた。

「あ、あの……」

「私はライアン。ホワイトタイガーの獣人で、この帝国で騎士団長をしている。さあ、こっちへおいで」

見下ろしてくる瞳から目を逸らし、私は内心でギュツと唇を噛んだ。

『ジュシン帝国政府公認養女縁組制度。条件は身寄りのない処女であること。養女として五年暮らせば帝国の市民権を付与、その後

の仕事の斡旋も可能』

そんなチラシを労働者ギルドで見つけ、食うに困り、藁にもすが
る思いで応募した。

人間の地位が低いこの世界で獣人が人間の娘を養女にするなどあ
り得ない。

それなのに、審査は拍子抜けするほどあっさり通ってしまった。

「えっ……騎士団長様！！？どうしてそんな方が私を養女なんか
……」

（絶対おかしい……こんなおいしい話、間違いなく裏があるに決まっ
てる）

警戒する私にライアンはひどく甘やかな微笑みを浮かべたまま距
離を詰めてくる。

「なっ……なんです？」

逃げる間もなく、巨大な影が頭上を覆い尽くす。
両腕が脇下に差し込まれ、身体がふわりと浮いた。

「あ、きやあっ!？」

「そんなに怯えなくていい。長旅で疲れただろう？まずは冷えた身体を温めて、お腹いっぱいご飯を食べよう」

「えっ、ちよっ、降ろし……!」

必死にもがいても、鋼のように硬い腕はビクともしないどころか、まるで幼児をあやすような手つきで、頭をよしよし♡と優しく撫でられた。

「人間は本当に小さくて軽いな。……大丈夫、今日から君の家になる屋敷へ向かうだけだ。そう不安がることはない」

「そういうことじゃなくて……っ！私、子供じゃありません！　ちやんと一人で歩けます！」

「私が抱いて歩いた方が速い。それに、父親に抱っこされるのは娘の特権だ。いいから大人しくしていなさい」

色気を感じさせる掠れた低い声で宥めるように言い、そのまま私を腕に抱え、足早に歩き始めた。

「ふふ、いい子だね。さあ、中に入ろうか」

見たこともないくらい立派なお屋敷の門をくぐり抜ける。

するとエントランスに並んだ大勢の使用人たちが、主人の帰宅に一斉に深く頭を下げた。

こんな子どものように抱きかかえられた姿を大勢に見られていると思うと羞恥心で顔から火が出そうだった。

けれど、軍服越しに伝わってくる獣人特有の高い体温と、背にふ

れている白い尻尾のやわらかな毛並みは、正直心地よく、悪くない
と思ってしまう自分がいた。

「さあ、着いたよ。お腹が空いているだろう？」

長い廊下を抜け、連れて来られた場所は天井にシャンデリアが吊
り下げられている豪華なダイニングだった。

テーブルには温かなご馳走がずらりと並んでいる。

ようやく降ろしてもらえと思ったのに、太ももの上に座らされ
た。

背後から包み込むように軍服がはち切れんばかりの硬い胸板で完
全にホールドされる。

腰のあたりには尻尾がするりと巻き付いて、逃げ道を塞いできた。

「えっ……あの、下ろしてください。椅子に座りますから……」
「だめだ。ほら、お父様が食べさせてあげるからじっとしてなさい」

「いや、大丈夫です自分で食べられますから……!」

抗議の声を上げると、一口大に切られた美味しそうなステーキを口に近づけられた。

「遠慮しないであーんして♡……そう、上手だね」

ここまでろくな食事をとっていないせいで、食欲を刺激する香りに我慢できずパクリと頬張る。

噛むとお肉はほろりととろけ、肉汁が口いっぱいに溢れ出した。
(お肉なんて久しぶりに食べた……。それにこんなに美味しいもの、生まれて初めて……)

まともな食事などいつぶりだろうか。空腹に支配された脳が、恥じらいを忘れて本能のままに咀嚼を急いでしまう。

「ふふ、いい子だ。ちゃんと食べられたな♡えらいぞ♡」

頭や背中を撫で回す大きな手のひらは、完全に子どもを褒めるときのようなのに、時折耳や首筋を触る手つきは妙にいやらしかった。（絶対におかしい……私、大人なのに……っ）
間違いない異常な状況なのに胸がとくん♡と甘くときめいてしまっている。

「おや、口元が汚れているよ」
「えっ……」

慌てて口元に手をやろうとした瞬間、吐息がかかるくらいに表情が抜け落ちた顔が近づいてきて、口の端についたソースを舌でぺろり♡と舐めとられた。

「ちよっ……!?!?ら、ライアンさ——」
「じっとしていなさい……」

抗議の声を塞ぐように、そのまま唇を強引に奪い、ぬるり♡と口の中へと侵入してきた。

驚いてすぐに唇を離そうとすると、頭を大きな手のひらがそっと添えられ、がっちりとは固定され、一ミリも動けない。

ざらりとした舌が、口内の柔らかな粘膜に触れ、ゆっくりと撫で回す。

「ん、んちゅ……っ♡」

初めてのキスだった。

小さな口内を、舌が犯すように這い回り、逃げようと舌を引っ込めてもすぐに捕まえられ、裏側までねっとり♡と舐め上げられた。

「んちゅ……っ、んあ……っ♡」

大人の男性の生唾が流れ込み、口の中をくちゆくちゆく♡とかき混ぜられる感覚に、背筋がぞくり♡と震える。

ちゆる……じゅぷっ……♡ちゅぱあっ……♡
息継ぎすら許されない深い口づけに、脳が溶かされ、次第に抵抗する力が抜けていき、彼の強引なキスに夢中になっていた。

「おや。エリサの舌は、私のキスが入ったようだな。こんなに素直に絡みついてくるなんて……甘いミルクをねだる赤子のようだな♡」
「ちが……っ、これは……っ」

（貴方が強引に舌を絡めるから、息ができなくて動いちゃったんじゃない……っ）

「んちゅ……っ♡ん、ふ……っ♡」

否定しようとして開いた唇を再び塞がれ、何度も舌をちゅぱつ、ちゅる♡と甘く吸い上げられる。

熱を運び、とろんと潤んだ私の目をじっと眺めながら、ライアンはニコニコと満足そうに目を細めた。

「初めてだったか？随分と初だな。少し可愛がってやると、すぐに甘ったるい顔になる」
「そんなこと……っ、ない……です……」

言葉とは裏腹に、呼吸は浅く、心臓は激しく高鳴っている。
(ファーストキスだったのに……)

出会ったばかりの男にキスをされるなんて絶対におかしいのに、嫌悪感は少しも湧いてこなかった。

それどころか、さっきまで冷え切っていたはずの身体はじんじん♡と甘い熱を運び始めている。

ようやく唇がゆっくりと離れると、銀色の糸がだらしなく二人の間を繋いで垂れていた。

その後も膝の上で、あーんと口を開けては食べさせられ続け、気づけばお腹はパンパンになっていた。

「……も、もう無理です。これ以上は……お腹、いっぱい……」
「そうか。これからはもう少し食べられるようにならないとな。今のままでも可愛らしいが、いつか折れてしまいそうだ……」

背中をよしよし♡と優しく撫で回され、そのままぐったりと彼の胸板へとしなだれかかる。

ろくなものを食べていなかった身体は、久しぶりの満腹感に眠気がじわじわと押し寄せてきた。

「もう、おねむか？食事はもういいが、ちゃんと体を温めて、綺麗にしないとな」

ぼんやりした頭で顔を上げると、瞳が細められ、近くで静かに笑っていた。

ひよいと抱え上げられ、再びお姫様抱っこをされる。

温かい胸板と太い尻尾にすっぽりと包まれながら、私たちはダイニングを後にした。

そのまま廊下を歩き、ライアンが扉を開くとふわりと湯気を含んだ暖かい空気が流れ込んでくる。

「これが、お風呂……」

聞いたことはあったが初めて見た。

磨き上げられた石の床の中央に、深く大きな湯船がどん、と構えており、こんな贅沢な場所が存在するのかと、広い浴槽をみて感嘆する。

（一体、どうやってこの量のお湯を用意してるんだろう……）

「さあ、一緒に入ろう。気持ちいいぞ」

ライアンはそのまま浴室の中へ踏み入り、ゆつくりと扉を閉める。完全に密室になったことに、思わず肩がぴくりと震えた。

「あ、あの、本当に一緒に入るんですか……？お風呂なら自分だけに入れますから……」

「私が一緒に入りたいんだ。それに君の体も洗ってやらなくちゃならないしな……」

「それくらい自分でできます……ライアンさんが入りたいなら私は入らなくていいです」

すると小さくため息を吐きながら碧玉の瞳が静かにこちらを見下ろす。

さっきまで見せていた優しげな笑みとは違う、どこか冷たいものが宿っていた。

「……随分と強情だな。エリサは自分の立場を分かっているようだ」

「えっ……」
「君だって、この募集が怪しいと分かっていたのに、ここまで来たん

だろう？」

心臓がひゅつと縮むような感覚が走り、ぐつと唇を噛み、不安を
ごまかす。

「五年間、私のもとで養女として暮らすだけで帝国の市民権が得られるなんて、本当に何も裏がないと思ってるのかい？」

「……思ってます。でも、もう……私にはそれしか道が……」

「そうだろうな。怪しいと感じていても君はここへ来た。一応、これでも私は騎士団長だからね。君については、ある程度調べさせてもらった」

「えっ……」

「孤児院を十六で出て、十八になるまでなんとか日雇いで食いつないでいたんだろう？それでも生活が回らなくなつて、ここへ来た……」
「そうですけど……」

（そんなことまで知られているのか……）

だが、娘として引き取られる以上、身辺調査されるのは当然なのかもしれない。

ライアンは動揺する私を見下ろしながら、口の端をわずかに緩めた。

「安心しなさい。ここにいる間は生活の面倒は全部私が見てやる。多少の我儘も聞いてやろう」

「どうせ君のような娘は、そのうち生きていく為に体売る事になっただろう。それなら、貧相な宿で男に買われるより、私のような金持ちの養女として養われる方が、よほど幸せだと思わないかい？」

（……実際、その通りだ）

日雇いの仕事で生きていくのは、もう限界に近く、最後には身体を売るしかないと薄々気づいていた。

そんな未来よりはこの男に娘として囲われているほうが幾分か救

いがあるように思える。

けれどそれをいきなり飲み込めるかと言われると別問題だ。

「エリサはただ何も考えず、私の娘として甘やかされて、愛されていれればいい。可愛がられることを拒否しなければ私は寛容な父親でいてやるぞ」

低く落ちる声には、これまでの甘やかさとは違う、お前は私を選ぶしかない、という支配的な上位者の傲慢さに満ちていた。

「さて、こういう話はもう、終わりにしよう。君も自分の立場が分かっただろうし……」

話を切り替えるように声の温度が戻り、彼は私の腰を抱えたまま、脱衣スペースに置かれたベンチに、そっと私を座らせた。

「さあ、服を脱がせてあげるからバンザイしなさい」
「えっ、ちよっ……！服くらい、自分で脱げますから……っ！」

抵抗など全く意に介さず、男らしい手が私の手首を掴み、まるで着せ替え人形の服を脱がすように、頭上へと腕を持ち上げる。

「あっ……だ、だめっ……！見ないでえ……っ」
「拒否してはダメだと言ったろう……まったく、悪い子だな」

抵抗も虚しく、あっという間に完全に裸に剥かれ、両手で身体を隠して震えるのを横目に、ライアンも軍服をあつさり脱ぎ捨てる。
彼の身体は、服の上からでも分かった厚い胸板が、直に見るとさらに圧倒的だった。

鋼のように無駄のない筋肉と、立派な体軀を覆う白虎獣人の証である白い毛並み。

「あつ……」

「なんだ、驚いて。獣人の裸を見るのは初めてか？これから毎日見ることになるんだ……今のうちに慣れておくことだな」

抑揄うように笑いながら目を細めると、彼は私を抱き抱え、温かいお湯の中へと足を踏み入れる。

たっぷり張られたお湯に浸かると、体がほぐれていくのを感じられて気持ちがいい。

「ん……なるほど。服を着ている時は細く見えだが、ここは立派に育っているな」

「あつ……！？」

私よりずっと大きな手が、背後から胸の膨らみを丸ごと包み込み、逞しい指先が、柔らかな乳肉へとむちゅっ♡と沈み込む。

彼の大きな手のひらからすれば、私の胸などまるでおもちゃのボー

ルのようだ。

「はあ……なるほど触り心地もわるくないな……」

「やあっ……ら、ライアンさん……っ、さわらないで……っ」

「拒否してはいけないと教えたはずだ。それに、私は君の父親になったんだ……お父様と呼びなさい」

恥ずかしさで涙目になる。

それでも手のひらは胸の感触を楽しむように、むにゅむにゅ♡と左右の膨らみを揉みしだいていく。

お湯の温かさと、乳房を可愛がられているせいで感じる甘い感覚に頭がぼやん♡と霞み始めた。

人差し指の腹がわざとらしく先端をかすめ、こりゅ♡と摘み上げられると、頭が真っ白になるような快感が波のように押し寄せてくる。

「ああんっ……♡や、ああっ♡お、おとうさま、もう、いいでしょ？」
「凝り固まっているからちゃんとマッサージしないとダメだろう？」
♡

硬くなった突起をきゅっ♡とひっぱり、グニユグニユ♡と揉み込み始める。

「あ、やつ……そこ、だめえっ♡」

「だめじゃないだろう。ほら、乳首は硬く血走って、いっぱい触って欲しそうにぷっくり♡勃っているぞ♡」

「ちがつ……これは、お風呂が温かいから……っ」

「そうなのか？なら、お湯から出してあげよう」

ざばあっ、と水音を立てて、腰を抱き寄せられたまま身体を持ち上げられた。

冷たい空気に濡れた上半身が晒される。胸の先端がさらにきゅっ

と収縮したのを逃さず、ライアンの大きな指の腹で、コリコリ♡と粒を転がすとぴん♡と弾いた。

「ひゃあ♡い♡やっ、やあ♡♡」

「素直じゃないな。お父様の指でこすられるのが、気持ちいいくせに♡……ほら、腰がビクビク跳ねているじゃないか♡」

びりっ、びりり♡と、胸の先端から甘い痺れが走る。

大人の男のざらついた指先がクニクニ♡と硬くなった突起を捏ねくり回した。

「んんっ、あ、あああ♡……♡お父様あっ、もう、むりっ……♡」
「いい声だ。もっと鳴きなさい。娘の可愛い声を聞くのは、父親の特権だからね」

娘にこんなことをする父親などいない。

頭では分かっているのに、その甘い言葉の響きに、胸がきゅんきゅん♡と高鳴ってしまふ。

逃げ場のない腕の中で、私はただ彼の与える快楽に喘ぎ、蜜壺からは愛液がトロトロ♡と溢れ出す。

「よし、お風呂からも上がったし、次はお股のお掃除しような♡」

抱きかかえられたまま、お湯から引き上げられる。

胸を弄んでいた指先が離れ、解放された安堵と、かすかな物足りなさに息を乱す。

そのまま大理石の寝椅子にもたれ掛かるように寝かされ、置いてあったクッションを腰に当てられる。

両足首を掴み、大きくM字に開かせ、私に覆い被さるようにして、その足の間にどっかりと座り込んだ。

「あつ……だ、だめっ……！そこは、見ないで……っ」

秘裂が完全に彼の目の前に曝け出される構図になり、慌てて両手で隠そうとする。

「隠さなくていい。私がココを綺麗にしてあげるからね♡」

私の足の間に顔を埋めるようにして見下ろし、寝椅子の脇に用意されていたガラスの小瓶を手についた。

栓が抜かれるととりとした透明な液体が私の割れ目にたっぷり♡と垂らされる。

「ひやつ……！つめ、たいっ……」

「すぐに温かくなる」

ところどころ♡のローションが、毛に絡みつきながら柔らかな肌へと広がる。

ライアンの大きな手のひらが、その粘液を馴染ませるように、秘所の周囲をぬちゅっ、ぬちゅっ♡と撫で回した。

洗われているというよりは、卑猥な愛撫だった。

「あ、んっ……♡やつ、お父様……なにするのっ……?」

「要らないものを全部剃り落として、ツルツルの、生まれたての綺麗な身体にしてあげるんだよ」

そう言ってライアンが手にしたのは、鋭い刃が光る剃刀だった。

「うそ……っ、いやっ、切らないでっ……!」

「動くと危ないから大人しくしてなさい。怖かったら目を瞑ってればいいからな」

ジヨリッ……

静かな音と共に、剃刀の刃がローションごと毛を削ぎ落としていく。彼の指が、皮膚を張るように太ももの内側をぎゅっと押し広げ、剃り残しがないよう丁寧に処理していく。

「あ、ああっ……もう、やだっ、恥ずかしいっ……!」
「恥ずかしがることはない。ほら、もうこんなに綺麗になった」

ジョリ、ジョリッ……

刃が肌を滑る微かな振動と、大理石の寝椅子の上で、陰部の毛をすべて他人の手によって剃り落とされていく恥ずかしさに頬が赤くなる。

それなのに、肌を撫でる指先の感触が、剃り跡の敏感になった皮膚にじかに伝わり、下腹部がぞくぞく♡と甘い疼きを持ち始める。

「んんっ、あ……♡」

「ふふ、いい子だ……だが、まだ大事な場所の周りが残っているから綺麗にしないとな♡」

ぬちゅり♡と、ローションにまみれた指で、秘唇のビラビラを剃るのに邪魔にならないようにつまみ上げる。

最も敏感な粘膜のすぐそばに冷たい刃が当てられ、息が止まる。ジヨリッ……と、クリトリスのすぐ脇の毛が削ぎ落とされるたび、恐怖と異常な快感が混ざり合い、ナカがきゅんきゅん♡と疼いてしまう。

「あっ……♡いやっ、こわいつ、こわいよおっ……♡」
「怖くないから、私に任せなさい……ほら、これで全部だ」

ジヨリ……ジヨリ……ジヨリシヨリ……

全て剃り終わると温かいお湯をざばりと掛けられ、陰毛が洗い流される。

愛液がじわり♡と滲みでた秘所は毛が一本もない、まるで幼子のようにツルツルになっていた。

「……素晴らしい。やはり人間の肌はスベスベ♡で美しいな」

ライアンはほうつと感嘆の吐息を漏らし、完全にパイパンになった私の恥丘を満足そうに眺めた。

「もう、いいですよ？脚開かせるのやめてください……」

「何を言ってる。エリサのお手入れはまだ始まったばかりだぞ……」
「えっ……！？」

ライアンは優しく微笑むと、寝椅子の脇にあった小さな木箱を開けた。

そこから取り出されたのは、柔らかそうな細い毛で作られた小さなブラシだった。

「その、ブラシは……なんですか？」
「ここを綺麗に磨くためのものだよ」

ぬちゆり♡とローションと湯が混ざった指先が、無防備になった秘唇の割れ目を、左右に大きく押し広げた。

「いやあっ……！あ、ああっ……！」

「ほら、見てごらん。毛に隠れて見えなかったが……君のここは、すっかり皮に埋もれてしまっているじゃないか」

私の足の間を覗き込んだライアンが、呆れたような、それでいてひどく愉しげな声を出した。

「これでは中に汚れが溜まってしまuish、なにより、こんな皮を被ったままの子供クリでは可哀想だ。お父様が綺麗にむきむき♡して、大

人クリトリスにしてあげないとな」

幼子を諭すような甘い声とは裏腹に、やってることは子どもへのしつけとは思えない淫らな調教だった。

ローションでぬめり気のある大きな指先が、包皮を左右にぐつと押し開く。

密やかに隠されていた小さな秘豆を指先でくいつ♡とつまみ出され、むき出しの状態で露わになった。

「あ、や……っ！ そんなところっ、触られたら、ヘンになっちゃう……っ！」

「怖がらなくていい。ほら、まずは皮の裏側から綺麗にしてあげるからね」

身体が逃げようと無意識に腰を引くとぐつと引き戻され、クリの根元の、かぶさっていた皮の境目に、濡れたブラシの毛先が押し当

てられた。

シャコツ……シユコシユコ……♡

「ああっ!?!んあ……♡」

「力を抜いて。痛くはしないし、エリサのおこちやまクリをお掃除して教育してやる♡」

シャコツ、シャコツ……♡シユコシユコ、シユコ……♡

剥き出しになったクリ豆を小刻みに撫でこすり始める。

極細の毛が、真珠の隙間や皮の裏側まで入り込み、無数の細い指で一斉に撫で回されているような、未知の感覚に、じわりと甘やかな痺れが滲む。

「あはっ♡ひ、ひやああっ♡やつ、やあっ♡」

「おや？ただ汚れを落としているだけなのに、こんなに気持ち良さそうにして……氣に入っただのか？」

「ちがつ……くすぐったいつ、おかしくなっちゃううつ……♡」

シャコシャコシャコツ……♡シュツ……シユシユシユ……♡

彼の動きが少しだけ速くなり、撫でられるというよりこしゅこしゅ♡と磨かれる。

あつという間に陰核はパンパン♡に充血し、覆っていた皮を押し除けてぷっくり♡と顔を出した。

「んんっ、あ、ああああつ……♡お父様あつ、もう、やめてえっ♡」
「やめる必要なんてないだろう……気持ちよさそうにしているくせに……ほら、皮が剥がれて、可愛いお豆が勃起して、顔を出してきただぞ♡」

「……んっ♡やつ、ああ♡はずかしいっ……♡」
「照れることはない。ちゃんと大人クリになれてる証拠だ。……ほ

ら、もっと根元から剥いてあげよう」

たましい指先が容赦なく皮を根元までグツと押し下げ、パンパンに充血した先端を限界まで引きずり出した。

先端をちょん♡と突いたり、円を描くようにぐるぐる♡となぞったり、シュコシュコ♡と細かく小刻みにブラシを動かす。

その全てが絶え間なく行われ、私を追いつめる。

「んあつ、ひいつ♡あつ、ひああつ♡そこ、だめえつ……！こすられるたびに……ヘンになっちゃう……♡」

「だめじゃないだろう？大人クリになるためにお父様が磨いてやっているのだからもっと頑張りなさい」

ブルルッ♡ブルッ……♡シュコシュコシュコシュコ……♡こしゅ、こしゅしゅ……♡

ブラシの毛束を震わせながらシュッシュッ……♡と小刻みに擦ら

れる。

繊細な毛先が敏感な突起を小刻みに苛むたび、あられない喘ぎ声
が口から漏れ出た。

「んんうっ……！あ、あああ……っ♡……っあん♡んあ……♡やあ、
あっ♡」

毛先が、わざと少し強めに押しつけられ、頂の芯まで刺激が突き
刺さり、快感が走る。

足の間に楽しそうに顔を埋めると、蜜を垂らして痙攣する私の秘
所に、ねっとり♡とした熱の帯びた視線を浴びせ続けた。

「私の言う通りに、力を抜いて気持ちよさに身を任せなさい……君
は今日から、私の愛しい娘なんだからいっぱい可愛がってやらない
とな……♡」

シュココココッ、じゅちゅっ、ちゅるる……♡

ブラシが擦れる音に、私自身から溢れ出す蜜の卑猥な水音が混ざり始める。

極細の毛先に苛まれたクリは、もう少し触れられただけでもビリ♡と電流が走るほど、ぽってり♡膨れ上がっていた。

「あはっ♡ひいつ、やだあっ……！ずっときもちいいのっ……来てるうっ♡」

「ははっ！エリサはほんとに愛らしいな♡もつと脚を開いてお父様に勃起クリを見せてごらん」

「しゃこしゃこしゃこ……っ！じゅちゅっ、じゅっちゅ……っ！」

ブラシが素早く往復するたび、自分の中から溢れ出る愛液が泡立ち、いやらしい音が浴場に響き渡る。

逃げ場のない快楽に頭の芯がトロトロに溶かされ、自ら腰を浮かせてブラシに花豆を押し付けていた。

「おや。自分からクリを毛先に擦り付けてくるなんて……随分とスケベな娘に育ってしまったな」

「ちが……っ、私……こんなっ……んあああっ♡♡」

「嘘をつく必要はないだろう？ほら、お前のクリはち切れそうなくらい硬くなって、もっと磨いて欲しそうにビクビク跳ねているぞ♡」

花豆をいじめ尽くす毛の動きが止まったかと思うと、赤く充血したクリトリスをつまみ出しぎゅっ♡と押し潰した。

強烈な痺れが下腹部を貫き、視界が真っ白に染まる。

「んああああ〜♡いっっちゃう……♡お、おとうさまあっ、もう、むりっ、やめてえっ♡」

「はっ！思い切りイきなさい」

ぐ、とさらに指に力を込められ、溜め込まれていた快樂が一気に弾けた。

「あああつ……！んああ、あああつ……♡♡」

びくんっ、と背中が跳ね上がり、子宮の奥から込み上げた強烈な波に身体が酷く痙攣する。

ダラダラ♡と蜜が溢れ出し、内ももを伝って寝椅子を濡らした。視界が霞み、あまりの快感に呼吸すら上手くできず、はあはあ……と肩を揺らして激しい絶頂の余韻に浸る。

……これで、やっと終わった。

そう思っただけで力なく瞳を潤ませていた私を見下ろし、ライアンはくすりと意地悪く微笑む。

するとイッたばかりで敏感になりすぎている花豆を、指先でくにゅくにゅと優しく揉み始めた。

「……んあ♡ああっ……♡さわっっちゃっ……♡やっ……♡」

触れられただけで甘い痺れがビクッビクッ♡と背筋を走る。

「嫌そうには見えないがなあ……ほら、エリサのお子様クリは可愛らしく膨らんで私に触られて嬉しそうだぞ♡」

「はあ……っ、はあんっ♡でも、もうっ……むり、です……っ♡」

「まあ……そう言うな。これから仕上げをしないと♡」

蜜まみれになった私の秘所に毛むくじゃらの顔を押し当てて。

「えっ……!？」

おまんこの香りを楽しむようにふう……と鼻息を荒くさせ、その吹きかけられる息の刺激にヒクヒクとクリ豆を疼かせる。

「はああ……♡雄を誘う甘ったるいメスの匂いがする。堪らん……」

ちゅっ♡と触れるだけの柔らかいキスを花豆に落とす。

チュッ……んむっ……♡ちゅっ……♡ちゅっ♡れろっ、れろれろ



柔らかい唇が、むき出しの突起を優しく包み込む。

限界まで感度が高まった真珠には雷が落ちたような衝撃だった。

「ひああ……っ!?!♡あああっ……♡」

唇でちゅうちゅ♡と優しく吸い上げられ、爪先まで甘い痺れが駆け抜ける。

「んっ……♡吸われるのも悪くないだろう?」

「んあ……っ、ちゅ、ちゅーしないでえ……♡おかしくなっちゃう……っ♡」

「ははっ、本番はここからだぞ♡」

ちゅぷっ、れろおっ……♡

「ひいああああっ!? んああああっ♡♡」

分厚い舌が、下から上へと、割れ目全体を舐め上げる。

獣人特有のザラリとした舌の感触と生暖かい生唾が私の蜜と混ざり合い、ぐちゅり♡と卑猥な音を立てる。

「んあっ♡だめっ、なめてるっ、お父様が、そこおっ……♡きたないよお……♡♡」

「そんなことはない。エリサの蜜はこんなに甘いんだな♡」

ちゆる、じゅぷうつ……♡ちゅう……♡

粘ついた愛液をじゅうじゅう♡と音を立てて吸い込みながらゴクリ、ゴクリ……♡と飲み込んでいく。

「んあはあ♡いやつ、やあ♡そなた、のんじゃやだつ……♡」

言葉とは裏腹に、私の足は彼の頭を挟み込むようにきゅつと内側に縮こまり、腰が勝手に浮き上がる。

ライアンは私の太ももをがっしりと掴んで固定すると、蜜口ごと口に含み、舌先で執拗に転がした。

じゅるる……ちゅぷつ、れろろお♡レロレロレロ……♡

「私の舌で舐められるのは気に入ったか？ザラザラしていて気持ちいいだろう……」

「ああ♡……♡ううつ……♡はい……♡いい♡」

言葉になってない返答をすると、パンパン♡に張った真珠の粒を、ずちゅっ♡と強く吸い上げた。

頭の芯が弾けるように、目の前がチカチカと点滅した。

「んんっ!! あああっ……!! あ、ああっ、いくうううっ!♡♡♡
あゝあゝあゝあゝ……♡♡」

びくんっ、びくびくびくっ……!♡ぷしゅっ……♡びしゃっ
くくく♡

子宮の奥からこみ上げた甘い快感が、秘所を通って一気に弾け飛んだ。

私の身体からどろり♡と大量の愛液が噴き出し、それをライアンは逃さず、大きな口でごくり♡と飲み込んでいく。

「はあつ、はあつ……つ、あ……」

初めての強烈な絶頂に、意識が遠のきそうになる。
痙攣が止まらない私を見上げながら、ライアンは口の周りを私の
蜜でテラテラ♡と汚しながら仄暗い笑みを浮かべた。

「いっぱいイケて偉いぞ♡これで大人の階段を登れたな♡お父様は
嬉しいぞ」

私はもう何も考えることができず、ただ与えられた快樂の余韻に
溶けながら、大理石の上でぐったりと目を閉じた。

【ライアン視点】

「ああ、氣を失ってしまったか」

大理石の寝椅子の上で、だらりと手足を投げ出して眠る小さな身体を見下ろす。

ブラシで弄んだクリトリスはぼってり♡と膨らみ、丁寧に剃り上げた子どものようなツルツルの股からは、まだ絶頂の余韻でダラダラ♡と透明な蜜が溢れ出している。

そのあられもない姿を眺めているだけで、下腹部に血が集中し、獣の血がふつつ♡と騒ぎ立てた。

「ああ、いいな。何も知らない生娘を自分好みに変えるのは実に気分がいい」

これまで言い寄ってきた獣人の女たちは、どれも氣が強く、私の

騎士団長という地位や血統を、自分を飾るためのアクセサリーとしてしか見ていなかった。

そんな打算にまみれた女たちから向けられる視線など、ただただ鬱陶しいだけだ。

私は本来、自分の庇護下にあるものを徹底的に甘やかし、自分色に染め上げて、可愛がりたい性質なのだ。

自分の思い通りになる男が欲しい女に、尽くしてやる義理などない。

その点、この娘は可愛らしい。

力もなく、身よりもなく、私が与える快楽と庇護に縋るしかない。怯えながら、それでも逃げきれず、されるがままに身体をひらく姿は、ひどくそそられる。

「ちゃんと大切に可愛がつてやるからな♡だが、私ももう限界だ……少し体を使わせてもらおうぞ♡」

とうに勃起し膨張していた獣の肉棒は、熱を孕んで大きく反り返っていた。

赤黒く充血した先端からは、すでに我慢汁がとろり♡と滴り落ちている。

このまま、あの蜜で濡れそぼる小さな入り口に、肉棒を根元まで突っ込んで、柔らかな処女肉を貫き、たっぷり♡と私の種を注ぎ込んでしまいたい衝動に駆られる。

「流石に今日はな……せつかく自分好みの娘が私のところへ来たんだ。いきなりこれをぶち込むのは風情がないよな」

眠るエリサの丸い額へとチュッ♡と優しいキスを落とした。
柔らかな身体に覆い被さるように身を屈め、自身の昂ぶった肉棒を、蜜まみれになっている秘唇の割れ目へとそっと押し当てた。

「ん……あ……」

小さな寝言が漏れるが、目を覚ます気配はない。

私は中には入れず、入り口の柔肉と太ももの内側で、巨大な男根を挟み込むようにして腰を動かし始めた。

ぬちゅりっ……ずちゅっ、ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡

私の先走り汁と、溢れ出し続ける娘の甘い蜜が混ざり合い、極上の潤滑油となって猥らかな水音を響かせる。

ツルツルになったばかりの滑らかな肌の感触。

腰を外側から擦り合わせているだけでも、まだ処女の狭くぬっちより♡とした割れ目が、私の肉棒に吸い付いてくる。

「はあっ……素晴らしい。人間のスベスベとした肌の感触も、処女の匂いも、全てがそそる……っ」

ずちゅっ……♡ぬちゅちゅっ……♡ぐちゅちゅちゅちゅっ♡

腰を打ち付けるたび、怒張したカリ首が、先ほど私が真っ赤に腫れ上がらせたばかりの真珠の粒をゴリッ♡と力強く掠めていく。

そのたびに、気絶しているはずの小さな身体が、びくんっ、びくんっ♡と本能的に跳ね上がり、さらに大量の愛液を噴き出して私の肉棒を濡らした。

「ははっ……♡気絶していても私のモノを感じているじゃないか。本当に淫らな娘だな」

ずちゅちゅちゅちゅっ！　ぱんっ、ぱんっ♡

気絶しているエリサを相手に、私はあふれ出る性欲のまま、荒々しく腰を振る。

中に挿っていないのに、ぬちゅぬちゅ♡とした柔肉にまと

わりつかれる感触と、まだ何も知らない清らかな娘を汚している愉悦で、だんだん脳が弾けそうになる。

「ああっ……いいぞ、出そうだ……っ！お父様のザーメンで、たっぶり汚してやる……っ！！」

腰の動きをピタリと止め、猛りきった肉棒を腹へと持っていた。

どぶっ、どぶどぶっ……！！！！♡
びゅるるるるるっ、どろおっ……♡♡

弾け飛ぶような勢いで、白濁した濃厚な精液が、彼女の腹の上へとぶちまけられた。

肉棒の切っ先から出た白い体液が肌の上でどろり♡と重たく広がっていく。

腹の丸みに沿って白濁がとろとろ♡と流れ、臍の窪みに溜まり、細

い腰から股の方へぬるく垂れていった。

「……っ、ん……」

眠っていた娘の身体がぴくり♡と震える。

長い睫毛がかすかに揺れ、眉がきゅつと寄った。

それでもまだ意識は浮上しきらず、夢うつつに濡れた腹をくすぐる、ヌルヌル♡とした感触に戸惑うように小さく身じろぐ。

「んう……な、に……？」

掠れた声が漏れた瞬間、私は目を細めた。

腹には今さっき吐き出したばかりの精がぬらぬら♡と光っている。完全に覚めきらないまま、自分の身体についている体液に気づき、彼女は目を見開いた。

「おや。起こしてしまったか」

精で汚れた下腹を指先でなぞる。
ぬるり♡と掬い上げた白濁が、彼女の肌の上でたたり♡と糸を引いた。

「んう……な、に……?」

強烈な絶頂の余韻でぐらぐらと揺れる頭のまま、うつすらと目を開ける。

お湯の温かさとは違う。もっと粘り気があって、どろり♡と肌に張り付くような……。

ぼんやりとした視線を、自分の下腹部へと落とす。

「……え?」

彼がツルツルに剃り上げた素肌の上に、べっとり♡と白い液体が広がっていた。

熱を持った白濁は、腹の丸みに沿ってとろとろ♡と流れ、細い腰から股の方へと垂れていく。

かすかに漂う、強い雄の匂い。
それが何を意味するのか、男を知らない私でも本能で理解してし

まう。

一気に血の気が引き、心臓がドクン、ドクン♡と鳴り始めた。

「おや。起こしてしまったか」

ビクッ♡と肩を震わせて見上げると、甘ったるい笑みを浮かべてこちらを見下ろしている。

彼の太い指先は、私の肌にこびりついた白濁をぬるり♡と掬い上げていた。

「ら、ライアンさん……これっ、ひゃあっ!?!」

「驚いたかい？ エリサの可愛らしい姿を見ていたら私も我慢できなくなってしまうってね♡」

彼がいやらしく糸を引く精液を、私の唇に容赦なく押し当ててくる。

「ほら、舌で舐め取ってお父様のミルクを味わってごらん」

逆らうことなどできなかった。

促されるまま、恐る恐る小さな舌を突き出し、白濁をちゅるり♡と舐め取る。

鼻を突くのは、むせ返るような獣の香り。

舌にこびりつくのは生々しいえぐみだというのに、それらが混ざり合った瞬間、極上に濃厚なミルクのような味わいとなって脳髓を殴りつけた。

(え……? ? ? すぐく、おいしい……っ)

ごくりと喉の奥へ飲み下した瞬間、胃の中で精液がじんわり♡と広がり、子宮の奥がきゅんっとなんて甘く疼いた。

「あ……っ、ふぁ……っ♡」

(どうして……？からだが、あつくて……もつと、ほしい……っ)

「効いてきたか。獣人の種にたっぷり溶け込んだ魔力は、お前たち人間のメスにとっては強烈な媚薬だからな」

甘く囁きながら、ライアンが私の頬を撫でる。

「害のあるものじゃないが、中毒性もあるからな……堪らんだろう？」

口内に残る濃厚な後味とフェロモンにあてられ、発情した身体が勝手に反応してしまう。

「んあ……♡うん、もつとお♡♡」

どろっと♡した白濁が欲しくてたまらない。

あの生臭い雄の匂いを嗅ぐだけで、秘所の奥からじゅわっ♡と勝手に蜜が溢れ出してしまう。

「ははっ……私のザーメンがそんなに気に入ったのか……ならこっちを舐めてごらん」

赤黒く怒張した巨大な肉棒が目の前に突き出された。

先端の鈴口からは、透明な雫がとろり♡と溢れ、先ほどの白濁よりもさらに強烈なフェロモンを放っている。

モワッ♡とした匂いに本能が煽られ、ふらふらと顔を近づけた。

「まずは先端からだ。……そう、舌を出して」

頭を撫でる大きな手に促されるまま、肉竿の裏に滲む雫をちゅるっ

♡と舐め取る。

んちゅっ……♡
れろおっ……♡

独特なえぐみが舌の上で転がり、その濃厚な味わいにぞくり♡と背筋が打ち震える。

「いい子だ。次はもっと口を大きく開けて、根元まで咥え込んでみなさい」

あ、あむっ……♡　じゅぷっ……♡

膨張した肉棒を小さな口内へと迎え入れる。大きすぎて顎が外れそうになるのに、獣の手で固定され、逃げることはできない。

「歯を立ててはいけないよ。舌の腹全体を使って、柔らかくしゃぶるんだ」

んんっ……♡　じゅるるっ……♡　ちゅぽっ……♡

獣の雄肉を口いっぱい味わわされながら、舌先でコロコロ♡と先端を転がす。

教えられた通りに動かすたび、上出来だとよしよし♡頭を撫でてくれる感触が心地よくて、いつの間にか夢中でじゅぷぷ……♡としやぶりついていた。

「ふふ、そうだ……そのまま、お父様のおちんぽミルクをいっぱい絞って飲もうな」

舌の腹を使い、カリ首の裏側をペロペロ♡と熱心に舐め回したり、高ぶった肉棒をできる限り咥え込み、自ら頬をすぼめてちゅううつ♡と強く吸い上げた。

ずぷ、じゅるるっ♡と卑猥な水音を立てて奉仕を続けていると、やがて口内を塞ぐ巨大な熱の塊が、ビクンッ、ビクンッ♡と大きく脈打ち始めた。

「ああ、いいな上手だぞ。ちゃんと可愛いお口で濃厚ミルクを受けとれよっ♡」

「んぐっ!？んぐうつ、んんっ……♡」

限界を迎えた猛りから、ドロドロ♡とした体液が、柔らかな口の粘膜へと勢いよく放たれた。

びゅるっ、びゅるるっ……♡ どくどくっ……♡びゅるるるるるるるるるる♡

濃密な獣の匂いとともに、おびただしい量の白濁がこれでもかと口内へ注ぎ込まれていく。

「待て……まだ、ごつくんしてはいけないよ。ゆっくりと口を開けて、舌を出してごらん」

ズチュ……っ♡と淫らかな水音を立てて肉柱が引き抜かれる。言われるがままに口を開き、小さな舌を突き出すと、さつき出さ

れた精液がぽたぽたと♡と顎を伝って零れ落ちた。

「だらしがないな♡ザーメンを口につっかけられて、すっかり発情したメスの顔になってる♡」

生臭くてえぐみはあるのに、舌にべったりとまとわりつくドロリ♡とした粘度と、獣匂のする生々しい味が、上等な濃いミルクのよう感じられる。

（あ、あついっ……おちんぼのミルク、すっごく濃厚で……おいしい……っ♡）

味覚までもが完全に精液の虜となり、もっと味わいたいと本能が歓喜の声を上げる。

「自分の舌でおちんぼミルクを転がして、味わってから飲み込みな

さい♡」

命令通りに、口を閉じてぐちゅぐちゅ♡と舌の上で転がす。
その濃厚な雄の味わいにうっとり目と目を細め、意を決してゴクリ♡嚥下した。

「んあっ……のうこう、で……♡へんななおいなのに、クセに、なっ
ちゃいそうで……おいしい、です……っ♡」

理性が完全にドロドロに溶かされ、気づけば、自ら唇の周りに付いた白濁までもペロリ♡と舐め取り、おちんちんをしゃぶり尽くし、最後の一滴までちゅううっ♡と吸い尽くしてしまっていた。

「ちゃんとちんぽ掃除までできて偉いぞ♡流石私の娘だ♡自分の舌で絞り出したお父様の特製ミルクは、格別だっただろう？」

満足げな声で褒められながら頬を撫でられると、快楽に支配された身体は歓喜し、秘所はヒクヒク♡と愛液を垂れ流し続けていた。

「んあ……っ♡ おとう、さま……っ♡ おまんこ、あつくて、ムズムズするの……っ。早く、さわって……イかせてえ……っ♡」

理性が完全に溶け落ちた私は、だらしなく脚を開き、おねだりをしてしまう。

とにかくこの下腹部の疼きを掻き消すような強い快感が欲しかった。

しかし、ライアンは小さく笑って首を振った。

「だめだ。口の周りも、身体も、私のザーメンでベタベタじゃないか。まずは綺麗にお風呂で洗ってからだ」

「えっ……あ、いやあっ……♡ 早く、イきたい、の……っ♡」

完全に発情し、もっと快感が欲しいと身をよじると、彼にひよいと抱き上げられ、透明なゼリー状の生物で満たされたバスタブへと連れて行かれる。

「汚れを食べてくれるスライム風呂だよ。お前の身体にこびりついた私のミルクも、こいつらが隅々まで舐め取ってお掃除してくれる」
広い浴槽を満たしている彼らは一斉に私の身体へとまとわりついてくる。

「ああっ!?!♡いやっ、つめたいっ、の……っ♡」

体内に溜まった魔力のせいで、発情している身体に、冷たい感触が異常なほど気持ちいい。
ぷるんとした粘体が胸の膨らみをすっぽりと包み込み、ピンと硬く尖った乳首を的確に見つけ出す。

ちゅううつ、ちゅぽっ♡と赤子が母乳を吸うように強く吸い上げられる。

「ああっ！♡ おっぱい、だめえっ……！♡ちゅうちゅう、吸われてるうつ……♡」

触手のようになり乳首をピンピン♡と弾かれる。

そのせいで背筋をビリリ♡と電流のような快感が突き抜けていく。愛液でドロドロになった股間へと、無数のスライムがぬちゅり……♡と殺到した。

「スライムはメスが大好きだからね♡お前の中から溢れ出るたっぷりの蜜に惹かれて集まっているんだよ」

大きく腫れ上がったクリトリスを丸ごと包み込み、ちゅうちゅう♡と吸い上げる。

さらに、冷たい粘体の一部が触手のように細く形を変え、痙攣する私の狭い入り口へと、ずぷり♡と浅く潜り込んできた。

「んあつ、ああっ！♡それおかしいっ……！♡スライム、しゅごいっ……きもちよすぎて、おかしくなっちゃうよおっ……！♡」

胸とオマンコを同時に責められ、快感のあまり身をビクビク♡とよじらせる。

「処女のお前に私のモノをいきなり入れたら……お前は壊れてしまう。それは嫌だろう？」

「あ、う……っ、いや、こわい……っ♡でも、あついつ、イかせてえ……っ♡」

「だから、急いではいけない。今日はお前が壊れないように、そいつらに私のモノが入れられるサイズまで、たっぷりとほぐしてもらいなさい」

膾口を触手でぐちゅぐちゅ♡と無慈悲に押し広げられながら、乳首をちゅぱちゅぱ♡と絶え間なく吸い上げられる。

「ああっ！だめ、ひろがつ、ひろがつちゃうっ……！♡スライムでえっ、イクっ、イカせてえっ……！♡」

「ああ、お前の蜜が出なくなるまで、何度でもスライムに搾り取られなさい」

巨大なモノを受け入れるためのマッサージと、未知の生物による容赦のない愛撫が、私の身体を限界の先へと突き落とした。

「あ、ああああああっ……！♡♡♡」

びくんっ、びくびくびくっ………！♡

背を反らせて強烈な絶頂を迎える。頭の中が真っ白に弾け飛び、私

は全身を震わせながら、スライムの海の中でぐったりと意識を手放しかけた。

「……よくほぐれたな。これで下準備は完了だ」

朦朧とする視界の中、ライアンにスライム風呂から抱き上げられる。

全身を綺麗にされ、入り口も十分に拡張されてところどころになった私の身体を、彼がバスタオルで優しく包み込んだ。

そのままベッドルームへと運ばれ、ふかふかのシーツの上に寝かされる。

「ひっ……？おとう、さま……これ、なに……っ？」

彼の分厚い指が、ところどころになった膣口に、ピンポン玉ほどの大きさの青白いゼリーの塊を押し当てていたのだ。

「お前の中を広げておくためのものだよ」

「えっ……あ、だめっ、入ってきちゃ……っ、んぐうつ！♡」

ぬちゅり♡と、冷たい塊が一番奥まで容赦なくねじ込まれた。
体内でピタリ♡と密着したスライムは、愛液を吸い上げながら、む
くり♡と少しずつ膨張し始める。

「あぁっ！？♡ちがつ、おなかのなか、ぱんぱんに……っ♡」

「初夜にお前が辛くならないように、そいつがお前の奥の柔らかい
壁を押し広げておいてくれる。……それなら、私の太いモノが入っ
てきても怖くないだろう？」

彼が私の太ももを撫でながら、恍惚とした笑みを浮かべる。

お腹の中に異物が埋め込まれているという恐怖と、体内でぐちゅ
ぐちゅ♡と蠢く感触から与えられる逃げ場のない快感とで、頭がぐ

ちよぐちよ♡になる。

「ひいつ、ああああっ……♡だめっ、おなかのなか、うごいてるうっ……♡」

「気持ちいいだろう？お前が満足すればそいつらも収まるから好きなだけイきなさい♡」

見知らぬ快感に怖がる私を抱きしめ、ちゅっ、ちゅっ♡と甘やかすような口づけを送ってきた。

「ああっ！♡いやっ、おとうさまあっ……♡ぬいて、これ、だしてえっ……！♡」

「だめだ。私を受け入れるための、大事な準備だからな。……ほら、力を抜いて」

背中をぽんぽん♡と優しく叩かれると、膣ナカにいる異物が最も

弱い場所をぬちゅり♡と撫で上げる。

処女の狭い入り口を内側から広げられる圧迫感と、逃げ場のない強烈な刺激に、私の身体はあっけなく限界を迎えた。

「あああああつつ！！♡♡いくつ、いつちやううつつ……！♡」

びくんっ、びくびくびくっ……！♡

私の絶頂に合わせて、体内のそれは溢れ出た愛液をごくろ♡と飲み込み、内側からきゅんっ甘い痺れが突き抜ける。

私は大きく背を反らせた後、ぐったりとしてしまい、彼のむちっ♡とした胸板に倒れ込んだ。

「はあっ……はあっ……あ……っ」

「……うん、よく頑張ったね。いい子だ」

汗ばんだ私の髪を撫でながら、ライアンは愛おしそうに目を細め

る。

彼の温かい体温と、下腹部で微かに蠢き続ける異物感に身を委ねながら、深い眠りへと落ちていった。

「んう……あ、あ……っ♡」

自らの口から漏れた甘い喘ぎ声で私は目を覚ました。

♡
（おなかのなか、ぱんぱん……っ。また、おおきくなってる……っ

私が夜通し垂れ流した愛液を吸い込んだスライムは寝ている間に膨張していた。

♡
膣の柔らかい壁にピッタリと張り付いて、中の異物感にウズウズ♡してしまふ。

「んあ……♡もう、やだ……」

「おはよう、エリサ。よく眠れたかい？」

顔を上げると、すでに漆黒の軍服をびちつと着込んだライアンが、ベッドの縁に腰掛けて私に微笑みながら見下ろしていた。

「お、おはようございます、っ…………♡おとうさまあっ…………♡もう…………」
「ああ、よしよし。お腹の中がパンパンで苦しかっただろう？偉かったな」

身体を起こすとなかのぬちゅぬちゅ♡とした塊が動き、快感を拾ってしまふ。

涙目で軍服の袖を掴むと、モフモフとした大きな手で頭をぽんぽん♡と優しく撫でた。

彼の匂いを嗅ぐだけで、どうしようもなく身体が熱くなり、お腹の奥がきゅんきゅん♡と疼いてしまふ。

「おねがいっ、もう、おなかいっぱい、苦しいの…………っ。はやくこれ、とって…………ください…………っ」

顔を真っ赤にして恥じらいながら懇願した。
すると宥めるように、涙ぐんだ目元にちゅっ♡と優しいキスを落

とす。

「ほんととは今から可愛がつてやりたいんだがな……私は仕事がある
のでね。済まないがもう少しひとりで頑張れるかい？」

「なら、もう抜いてください、なか、むずむず♡してつらいの……
♡」

「だがつとおまんこのナカを広げて安定させないとお前が辛いん
だぞ」

「そんな……っ！もう、じゅうぶん、ひろがつてるからあつ……！」

絶望する私の太ももを撫でながら、スライムが詰まったままの股
間を指先でコンコンと軽く叩いた。

瞬間、大人しく張り付いていた体内の塊が震え、奥の壁をずちゅ
り♡と叩く。

「ひいああっ！？♡♡うごいてっ……♡」

「今日は一日、それを入れて過ごしなさい。帰ってきたら目一杯愛してやるから」

「むりつ、こんなの入れたままなんてっ……！はずかしいよお、おとうさまあっ！」

「いい子で待つていれば、夜にたっぷりご褒美をあげよう。いつてきますのちゅーは？」

泣きながら縋る私をぎゅっ♡と抱き寄せ、舌が絡みつくようなキスをしてきた。

ちゅぷっ、れろおっ♡ちゅっ……♡ちゅるるっ……♡

大きな舌で口のなかを犯すように可愛がられて、身体は官能的な欲に支配されていく。

膣ナカにぬちゅっ♡とした栓を残したまま、君ならできるよね？と言わんばかりの笑顔を見せて部屋から出て行ってしまった。

「あ、あああっ……どうしよう、こんなのおっ……♡」

一人残されたベッドの上で、悶えているとコンコン、と控えめなノックの音が響いた。

「エリサお嬢様。お着替えのお手伝いに参りました」

ビクッ、と肩が跳ねる。

「は、はいっ……起きて、ますっ……」

「失礼いたします」

獣人のメイドたちが静かに部屋へ入ってくる。

（どうしよう……。歩いたら、スライムが動いて、バレちゃう……。っ）
歩くたびに狭い入り口から子宮の入り口までをピタリと塞ぐゼリー状の塊は、うにゆうにゅ♡と動いて、敏感になった膣壁を刺激してくるのだ。

「さあ、お嬢様。こちらが旦那様からお言いつけのあった、本日のドレスでございます」

なんとか立ち上がった私に、メイドはふんわりと膨らんだパニエに、溢れんばかりのレースとリボンがあしらわれた、淡いピンク色のドレスを見せてきた。

（いくらなんでも、幼すぎない……っ？）

お人形が着ているようなそのドレスは、成人した大人が着るには少し幼いデザインだった。

「旦那様が、エリサお嬢様にはこの色が一番お似合いになるだろうと……」

「えっ……あの、自分で、着られますからっ……!」

「これはひとりで着られるようなドレスではございませんし……旦那様から、大切なお嬢様のお世話を任されておりますゆえ。……どうぞ、ご安心ください」

躊躇う私から、有無を言わせぬ手つきで、バスタオルが剥ぎ取られる。

真っ裸のまま、使用人たちの前に立たされる。

恥ずかしくて脚をきゅっと閉じるが、その反動でナカの異物がぐにゅり♡と形を変え、ビクツと身体が震えてしまう。

「んんっ……あ……っ♡」

メイドたちの手によって肌着を着せられ、腰回りにふんわりとしたパニエが重ねられる。

その上にドレスを着るとふんわりと広がったスカート中で、剥き出しの秘所はスー・スー♡と冷たい空気に晒されている。

（お腹のなか……スライムが、動いてる気がするっ……♡）

メイドの視線が自分の下半身に向けられるたび、淫らかなものを膣で咥え込んでいることがバレるのではないかと、恐怖と羞恥で気が狂いそうになる。

ナカの塊が私の緊張に反応するように微かに脈打ち、それがまた甘い疼きとなって下腹部をきゅううっ♡と収縮させた。

「……とっても可愛らしいですよ、お嬢様」

鏡の前に立たされた私は、甘いフリルに包まれた自分と目が合った。

外見は純真無垢な少女そのものだが、ドレスの下では、絶え間ない疼きに耐えきれず、いつまでもナカを広げられ続けているいやらしいメスの身体が隠されている。

（おとうさまの……いじわる……っ♡こんなの、よるまで、たえられないよお……っ♡）

【ライアン視点】

書類仕事を片付けながら、数週間前の出来事を思い出す。

元々養女などに興味はなかったが、顔を合わせた友人のラスティーが、人間の娘を引き取った事をひどく上機嫌に語っていたのだ。

『お前も人間の娘を飼ってみろよ。獣人のメスって、こっちが尽くしても当たり前みたいな態度とるだろ？ でも人間の娘の人生は引き取った俺達しだいなんだ……なにより、可愛いんだぞ！』
『でもお前、その娘にかなり貢いでるって聞いたぞ。結局いいように

使われてるだけじゃないのか？」

『うちの娘は可愛いからいいんだっ！そりゃ最初は警戒してツンツンしてたけどな……徹底的に甘やかして、気持ちいいこと覚えさせれば、今じゃ甘えたのお姫様だ』

『お前のほうがその人間のメスに入れあげているように見えるがな……』

『とにかくだ。引き取っちゃえば自分好みの女を一から育て上げられるんだぜ？こんなに楽しいことは他にねえだろう！』

そんな話を聞き興味が湧き、養女候補の書類を眺めていた時に見つけたのが、エリサだった。

その日暮らしてやせ細り、身寄りもなく、どこか不安げな瞳を浮かべる少女。

そんな彼女をひたすら甘やかし、自分好みに調教したらどうなるだろう。

想像するだけでズボンの下がむくむく♡と立ち上がってきたもの

だ。

ガチャリ……

「団長――人間の女の子養子にしたって聞きましたけどもう、手をだしたんですか？」

執務室の扉が開き、狐獣人である副官のフォクシーが下世話な質問をしてくる。

「答える義務はない。黙って仕事しろ」

「あゝそうやって答えをはぐらかすってことはもう、楽しんだんだゝ団長やらしいゝ」

私のデスクに肘をつき、ニヤニヤしながら、狐の耳をピクピクと揺らしている。

「大体、あんな怪しい養女募集の広告に引つかかるような人間の小娘なんて、どこの家に行っても結局すぐ手を出されてオモチャにされるんすから、可哀想っちゃ可哀想ですよね」
「そこまで酷い扱いはしてない……はずだ……」

凶星を突かれ、ペンの動きがほんの一瞬止まる。誤魔化すように小さく咳払いを挟んだ。

「ちゃんと手はだしてんじゃないですか。まあ、俺ら獣人のほうが圧倒的に寿命が長いから、死ぬまで金とメシの面倒を見て大事に飼ってやるだけ、外で野垂れ死ぬよりはよっぽど幸せなんですようけど……」
「あの子の場合はそうだろうな、飯すらろくに食えてなさそうだったからな」

フォクシーがニヤけたまま身を乗り出し、距離を詰めてくる。

「でも人間の女なんて、団長のバカデカイので突いたら、一発で壊れちゃってつまんなくないですか？」

何もわかっていないと、ため息をつく。

「だからこそ、壊れないように時間をかけて自分好みに作り替えていくのが楽しいんじゃないか」

私の返答にフォクシーがポカンとする中、手元の書類にペンを走らせながら、自然と口角が上がるのを止められなかった。

「獣人の女よりはるかに弱いが、その脆さが庇護欲をそそいでいいんだろ……ともかく我が家に迎え入れたのは正解だったよ。素直で、愛らしくて……私を見るだけで怯えて震えるくせに、甘く鳴いてすり寄ってくる。あんな可愛い生き物は他にいない」

今朝、私が仕込んだスライムを腹に抱え込んだまま、苦しいと泣いて縋ってきたエリサの姿を思い出す。

私の言葉に、フォクシーが目丸くした後、下卑た笑みを深める。

「へえー！団長がそこまでご執心だなんて珍しいっすね。よっぽど上玉のメスなんだ」

フォクシーが鼻を鳴らし、下心丸出しの反吐が出るような提案をしてきた。

「そんなにいい女なら、俺にも一度貸してくださいよ。味見くらい」

——ドンッ！！

次の瞬間、私はフォクシーの首根っこを掴み、デスクに力任せに叩きつけていた。

「がはっ……！？だ、団長……っ！？」

喉の奥から、獣特有の低い唸り声が漏れた。

抑えきれない圧倒的な殺気と魔力が執務室内に膨れ上がり、空気がビリビリと凍りつく。

「今、なんと言った？」

「ひっ……あ、が……っ」

首を締め上げられたフォクシーは、狐の耳と尻尾を恐怖で力なく丸め、顔を真っ青に引き攣らせて酸素を求めてあえいでいる。

「エリサは私のものだ。他のオスに触れさせる訳がないだろう？」

「あ……っ、も、申し訳……っ」

「次はない。あれに指一本でも触れようとしたら……その首、引き千切って、晒し首にするぞ」

手を離すと、フォクシーは床に崩れ落ち、激しく咳き込みながら逃げるように執務室から転がり出て行った。

「……チッ。自分の女を他人に貸すオスなどいるものか」

苛立ちを鎮めるように息を吐く。

他の男の口からあの子の存在が出ただけで、腹の底からどす黒い独占欲が湧き上がってくる。

誰の目にも触れさせたくない。

ふたりだけの箱庭で、私だけを見て、私が与える快感に溺れさせて、一生を終えさせたい。

引き出しから監視の魔石を取り出し、魔力を流し込んだ。

空中に投影された映像には、我が家の温室でティータイムを過ごすエリサの姿が映っていた。

椅子に腰を下ろした瞬間、彼女が息を吞んで背筋を反らせるのが見えた。

腹の中で蠢くスライムが奥をぐちゅり♡と抉ったのだろう。

誰にも言えない快感に耐えきれず、テーブルの下でドレスの裾をぎゅっと握りしめ、顔を真っ赤にして涙ぐんでいた。

（……可愛い。あのふんわりとしたスカートの下で、私の分身が、一日中お前のナカを苛めているんだね）

限界まで焦らされたエリサの姿を見て、軍服のズボンが痛いほど張り詰めてくる。

「……早く仕事終わらせて帰ろう」

私は残りの仕事をすべて片付け、愛しい娘が待つ屋敷へと急いだ。

寢室の扉が開き、薄暗い部屋の中に光が入る。

ベッドの上で丸くなっていた私は、その気配に弾かれたように顔を上げた。

「ただいま、エリサ。いい子でお留守番できたかな？」

軍服姿のライアンが、甘い笑みを浮かべて部屋に入ってくる。

その姿を見た瞬間、一日中張り詰めていた理性の糸が、プツンと音を立てて切れた。

「あ、あ……っ、おとうさまあっ……♡」

ベッドから転がり落ちるようにして駆け寄り、その厚い胸板にすがりつく。

歩きたびに、股間に詰め込まれたスライムが子宮口をぐちゅりと抉り、甘い痺れが脳みそを真っ白に染め上げる。♡

朝からずっと、少し動いたたびにお腹の中をかき回され、頭はおかしくなりそうだった。

ドレスの下はもう、自分の蜜でぐちょぐちょ♡になっている。

「はは、そんなに私が恋しかったのかい？」

分厚い腕が私の身体を抱きとめ、ドレスの上からふくらとしたお尻を鷲掴みにした。

その衝撃だけで、ナカの塊がずるんっ♡と形を変え、全身がビクンッと跳ねる。

「ひぐっ……あ、んあっ！♡ もう、むりっ、これ、とってえっ……！♡」

ライアンの胸元に顔を擦り付けながら、甘えるように懇願した。
男らしい濃密なフェロモンを嗅いただけで、奥の柔肉がきゅんうんっ

♡と収縮してスライムを締め付けてしまう。

「ん？取ってほしいのか？せっかく一日中お前のナカを可愛がってくれたのに」

「やだっ、もう、やだあっ……！……スライムじゃ、だめなのっ……おとうさまのが、いいのおっ……！♡」

はしたない言葉だと分かっているのに、快感に溶かされた脳はもうそれしか考えられない。

涙と涎で顔をぐしゃぐしゃにしながら泣きつく私を見て、彼の瞳が、酷く嗜虐的に歪んだ。

「……ああ、最高に可愛いよ、私のエリサ」

逞しい腕に抱き上げられ、そのままふかふかのベッドへと押し倒される。

私を覆い隠すように被さってきた巨大な身体から、彼の体温がじんわり♡と伝わる。

「一日中、ナカをそいつにイジられて……ずっと私のことだけを考えていたんだろう？」

「あ、はいっ……♡おとうさまの、おおきいのが、ずっと、ほしくてえ……っ♡」

「そうか、ならどれくらい広げられたか、見てやらないとな」

邪魔なパニエとドレスの裾が、躊躇いなく腰の上まで捲り上げられる。

ノーパンのまま一日中過ごした秘所が、丸見えになるように晒された。

恥ずかしくて太ももを閉じようとするが、膝の裏に太い腕を差し込まれ、M字に大きく開脚させられてしまう。

「ひああっ……♡み、みないでえっ……♡♡」

「おお、とろとろ♡にほぐれているな……私の魔羅をナカでちゃんと啜え込めるくらいにはなっている。偉いぞ♡」

ライアンが感嘆の息を漏らす。

クリトリスはぷっくり♡と腫れ上がり、溢れ出た愛液はドロドロになったスライムと混ざり合ったり、とろおり♡と糸を引くようにこぼれ落ちていた。

ピンポン玉ほどの大きさだった塊が、私の蜜を吸って何倍にも膨れ上がり、入り口をぷっくりと押し開いたまま、おまんこ♡全体にへばりついていた。

「お願いっ、はやく、ぬいて……っ♡もう、我慢できないの♡♡」
「そうだな。もうこいつの役目は終わりだ」

彼の指先が、秘所から顔を覗かせているゼリーの端を摘み、ゆっ

くりと外へ向かって引っ張り出された。

「ああああっ！♡ぬけ、ぬけるうっ……！♡」

ずるるっ、ずぼぼぼっ……！♡♡♡

産道から引きずり出されるような強烈な排泄感。

限界まで拡張されていた膈壁を擦り上げながら、巨大な塊がずぼ……♡という卑猥な音を立てて取り出される。

ぽっかりと空洞になったナカの喪失感と引き抜かれた快感に、私は背を反らせて激しく絶頂した。

「んああああああっ……！♡♡」

びくんっ、びくびくびくっ……！♡ぷしやあ~~~~♡
強烈な快感に喜ぶようにおまんこからぷしゅぷしゅ♡と潮を吹き

出す。

「はあっ……はあっ……あ、あ……っ♡」

「こんなに愛液をこぼして、実にいやらしい♡中身が空っぽになつて、寂しいのかい？」

スライムを取り除いた彼は、準備は終わったとばかりに自らの軍服のズボンに手をかける。
布越しでもわかるほど凶悪に膨れ上がっていたソレが、弾き出されるように姿を現した。

「ひっ……！？」

赤黒く猛り狂った巨大な肉棒。

怒張した先端からはすでにとろりとした先走りが溢れ、獣の強い雄の匂いを放っている。

私はぷるぷる♡と快感の余韻で震えながらも、ゴクリ♡と喉を鳴らした。

「さあ、ご褒美の時間だ。お前が一日かけて広げたそのおこちゃま処女まんこで、私のモノを根元まで飲み込みなさい」

ぬちゃり♡と私のとろとろに濡れた入り口に、赤く膨張しきった亀頭が擦り付けられる。

「ひっ……あ、あっ、おおきい……っ、おとうさまっ、はやくっ、はやくっ……!♡」

「私の娘は本当にいやらしくて可愛いな♡力を抜きなさい……♡私のモノでお前のナ力を満たしてやるからな♡ちゃんと受け止めるよっ……♡♡」

ちゅっ、ちゅっ♡と目元や唇に降るようなキスを落とされる。

優しく溶けるような声で甘やかされる安心感に、身体の力みが解けると……

ずぷりっ……♡どちゅちゅちゅ……♡♡

「あ、あああっ!?!♡♡」

膣壁を押し広げ、猛った肉棒が侵入してくる。

スライムとは違う圧倒的な質量とフェロモンを持つ雄の象徴は、拡張され、とろとろ♡になったおまんこに何の抵抗もなく、ずぷり♡と沈み込む。

ずちゅっ……ずぷぷっ……♡ずぷぷぷ……♡

「しゅごいっ……!♡♡なかに、おとな、おちんぽが、はいつてくるぅっ……♡♡♡」

「ああ、そうだな……♡お前の処女おまんこも最高だぞ♡私の為に

あるようだ……♡ちんぽを締め付けるように、うねって……っ♡エリサ、苦しくないかい？」

「あっ♡♡あつ、あ♡くるし、くない、です……っ♡♡おなか、ぱんぱん……で、うれしいです♡とけちゃいそうっ……♡♡」

膣ナカを膨張した肉棒が埋め尽くし、最奥の弱い部分、子宮の入り口にまで、分厚い先端がこっ♡♡と到達した。

「んあぁづ！？♡♡あぁつ、あっ♡♡♡おぐつ、ぶつかっ……♡♡♡」
「ハハッ！おくが気に入ったのか♡♡ちゃんと言ってエライな♡……お父様と一緒にもっと気持ちよくなろうな♡」

ぽっかりと空いていた空洞が、本物の雄に満たされる喜びに、肉竿を抜くように媚肉がヒクヒク♡♡と激しく波打ち、奥を突かれる度に絶頂してしまう。

ライアンの腰がゆっくりと動き始める。

ずっぽおっ♡……ぬぷうっ……♡

抜いたとおもったら、じわじわ♡と根元まで深く沈み込む。

そのたびに、中で溢れ返った蜜がぐちゅぐちゅ♡といやらしい水音を立てた。

「あ、あっ……あぁっ！♡おとうさまっ……♡」

「んっ……いい声だぞ、エリサ……お父様にいっぱい甘えてみせなさい♡」

ちゅっ、と額に優しくキスが落ちる。

ライアンの腰の動きはどこまでも丁寧で、私を壊さないように、甘やかすようにゆっくりと膣道を掻き回した。

ごりゅっ♡……ぬちゆるるっ♡……ずぷぷぷっ♡

「ああっ♡ んあつ、ひああっ……♡♡なか、ぐちやぐちやになっ
ちやううつ……♡♡♡」

「スライムの時より気持ちいいだろう？私の太いのが、お前の柔ら
かい壁を隅々まで撫で上げているのがわかるか♡」

「わかるつ、わかりますうつ……♡おとうさまの、おちんぽ、おつき
くて、あったかくてえ……つ♡」

のスポットを、猛った肉棒の先端でねつとりと擦り上げる。
バキバキ♡に硬く反り返ったモノで奥を抉られるたび、全身の神
経が甘く痺れていく。

「ひんっ！♡ そこつ、そこ、だめえつ……！♡」
「ここが気持ちいいのかい？……可愛いな♡何度でも突いてやるか
らな♡」

どちゅつ、ごりゅつ……♡ごちゅんっ、どちゅん……♡

彼はわざと私の一番感じる場所だけを狙って、執拗に重い腰をゆっくり打ち付けてくる。

「ああっ！♡だめっ、そこばかりっ、おかしくなるうっ……！♡」
「我慢しないでいい。私のモノを咥え込んだまま、何度でも好きにイきなさい」

男らしい手が私の汗ばんだ髪を撫でる。甘やかされながらも、逃げ場のない快感で頭が真っ白に染め上げられてしまう。

「んんーっ！！♡あ、あああああっっ！！♡♡♡♡」

びくんっ、びくびくびくっ……！♡

子宮が激しく収縮し、太い肉竿をぎゅうぎゅう♡と力強く締め上げながら、私は今日何度目かの強烈な絶頂を迎えた。
蜜壺からじゅわああっ……♡と潮が吹きこぼれる。

「はあっ……はあっ……あ……っ♡」

「……んっ、すごい締め付けた。気持ち良くなれてえらいな♡」

私がぐったりとシーツに沈み込むと、ライアンは愛おしそうに私の目元にちゅっ♡とキスを落とした。

彼のモノは私の奥深くに突き刺さったまま、まったく果てる様子もなく、むしろ硬さを増してドクンドクン♡と脈打っている。

「んあ……♡おとう、さま……イって、ない……っ♡エリサのナカ、よく、なかった？♡」

快楽に染まったばやん♡とした頭で涙目になりながら問いかける。

「はっ！そんなわけないだろう？うちのお姫様は本当にどこまで私を興奮させれば気が済むんだ……」

私の言葉を聞いた瞬間、ライアンの喉の奥から、低く甘い獣の唸り声が漏れた。

見上げると瞳がギリ♡と光った気がした。

「初めてだから加減してやったのに……人の理性をぶった斬るようなこと言いやがって、もう、我慢の限界だ♡♡」

「ひっ……？♡お、おとうさま……っ？」

「しっかりしがみついていなさい。絶対に離してやらないから……♡」

ライアンは私の両脚を掴むと、自身の広い肩へと担ぎ上げた。

秘所が限界までパクリと押し開かれ、たらたら♡の蜜液が垂れている。

ぱあんっ！！♡パンツ、パン！♡

「あがつ！？♡♡」

先ほどまでの優しい動きが嘘のように、荒々しく暴力的なまでの腰の打ち付け。

獣の本能を剥き出しにした重い一撃が、子宮の入り口を容赦なくドス♡と突き上げる。

ぱあんっ！♡ぱあんっ！♡ずちゅぶうっ……♡どちゅん……♡

「あぁっ！♡あぁっ……♡あぁあん……♡おまんこっ、壊れちゃうっ……！♡」

がっちりとした腰が打ち付けられるたび、私の身体がベッドの上で激しく弾む。

容赦のない雄の腰振りに、休む暇もなく与えられる暴力的な快感の連続。

とろけた脳みそは完全に思考を放棄し、ただ彼にナカを滅茶苦茶にされる喜びだけが、頭を甘く支配していた。

「ああ、可愛い私のエリサ♡その快樂に溺れた……あられない顔をもっとよく見せろっ……♡」

ちゅっ……♡ちゅるるっ……♡ちゅっ、ちゅっ♡レロレロ……♡じゅるる……♡♡

顔を引き寄せられ、全てを食い尽くすような熱いキスをされる。唇の端からは、だらり♡とよだれが垂れた。

「んっ……♡はあ、はあん♡」

「ああ、エリサ……っ、エリサ、私のエリサ……お前の子宮に、私のすべてを注ぎ込んでやる……っ！」

狂ったように私の名前を連呼しながら子宮の奥深くまで突き入れた状態から、さらに渾身の力で腰を押し付けてきた。

「あ、あああああつつ！！♡♡」
「つつつ……！！♡」

♡ びゆるつ、どくつ、どくどくどくどくつ……！ドピュピュピュッ……
♡♡ デュルルッ……♡ どぴゅ~~~~♡♡ どぽぽぽ……
♡

子宮の壁に直接、焼けるように熱い精液が叩きつけられた。

ドロドロ♡としたとろみのある大量の白濁が、私の胎内をこれでもかと満たしていく。

ドクン、ドクンと肉棒が膣ナカで脈打ったびに、とめどなく溢れ出す獣の種。ぺたんこだった私のお腹がぽこり♡と不自然に膨らむのがわかった。

「んんっ、ああ……っ♡あついっ、おとうさまのっ……、おなかのなか、いっぱい……っ♡」

繋がったまま精液を注ぎ込まれ、お腹がはち切れんばかりに満たされる充満感に身をよじらせる。

がくがくがくっ♡と全身を痙攣させながら、再び深い絶頂の波に沈んでいった。

どれくらい時間が経っただろうか。

意識を飛ばし、快感の余波でひくひくと痙攣していた私は、頬に落ちる優しいキスの感触でゆっくりと現実へと引き戻された。

「……ん、あ……っ♡」

「お疲れ様、エリサ。よく頑張ったね♡」

汗ばんだ前髪を優しく梳かれ、ちゅっ、ちゅっ♡と額や唇に労う

ようなキスが何度も降ってくる。

ライアンの腕の中にすっぽりと包み込まれ、ほっと小さく息を吐いた。

けれど、下半身の強烈な違和感に気がついて、びくっ♡と肩を揺らす。

「おう、さま……っ。あの……おなかのなか、いっぱい……苦し
い、です……っ♡♡」

膣ナカには未だにライアンの巨大な楔が根元まで深く突き刺さったままだった。

大量の白濁を注ぎ込まれてぽっこりと膨らんだ下腹部が、彼のモノで圧迫されている。

流石に限界だと腰を引いて逃れようとすると、膣壁に彼の楔がぎゅっ♡と吸い付いてきた。

「ひああっ!?!♡ なにつ、ぬけ、ないっ……!?!」
「ああつ、すまない。無理に動いてはいけないよ」

ライアンが慌てて私の腰を抱き寄せ、再び奥深くまでぴったりと密着させる。

「ぬ、抜けないの……っ? どうして……っ♡」
「……獣人の雄はな、自分のメスの胎内に確実に種を残すために、射精後に根元が大きく膨張して栓をする構造になっているんだ。だから、射精が完全に収まるまでは、こうして繋がったまま離れられない」

そう言って、ライアンはぽっこりと膨らんだお腹を手のひらで円を描くように撫で回したり、ぽんぽん♡と優しく叩いてきたりした。

「ひゃいっ!んあ……♡あ、あっ……♡それ、奥に響いて……♡」

ついナカを締めるようにキュッと力が入る。

「ああ……可愛いなあ……♡♡お前のお子様おまんこが義父ちんぽをぎゅうぎゅうと締め付けて離さないから、まだ子宮に子種を注ぎ込みたがっているよ……♡」

彼の言う通り、完全に私を塞いでいる肉の楔は、未だに硬さを失うどころか、ドクンッ、ドクンッ♡と脈打ちながら、じわじわと新たな白濁を絞り出し続けていた。

「もう……むりっ……はいる場所、ないよおっ……♡」

「大丈夫だ。お前のおまんこは私の精液を嬉しそうに受け入れている……それに私なしでは生きられないようになるためには大事な事だ」

「そんなあ……やだあ……♡」

「でも、お父様の精液でナカを満たされるの……大好きだろう?」
「うっ……それは、好きです、けどっ……♡」

とんでもなく恥ずかしいことを言われているはずなのに、子宮の奥がきゅんきゅん♡と疼いてしまう。
完全に快楽に絆され、蕩けた顔を見せる私を見て、ライアンは満足そうに微笑み、私の唇を深く塞いだ。

ちゅぷっ……♡れろおっ……♡ちゅるるっ……♡

唾液をねっとり♡と絡め合わせる、蕩けるような深いキス。

獣のように荒々しかった先ほどの交尾とは違う、どこまでも私を愛おしみ、慈しむような口づけに身体の芯がじわり♡と熱くなる。

「今日はこのまま眠ってしまいなさい。繋がったまま寝るのもないのだめだから♡」

「んあ……♡はいっ……おとうさまあ……♡」

注ぎ込まれた大量の白濁は一滴も外に逃げることなく、私の子宮に留まり続けている。

お腹の中を雄の体液でマーキングされ、メスとして蹂躪されることへの背德的な興奮と充足感に包まれる。

（エリサは、一生お父様に可愛がられるためだけの淫らなお人形さんなんだ……♡）

ライアンの大きな胸板に顔を埋め、ナカで脈打つ彼の鼓動を子守唄のように感じながら、甘い微睡みの中へと落ちていった。

「んう……、あ……」

彼のものが一晩中膣の中に居座り続けているせいでお腹がずしりと重い。

見上げると、すでに目を覚ましていたライアンが、愛おしそうに私を見つめていた。

「おはよう、私の可愛いエリサ。よく眠れたかい？」

「おとう、さま……おはよう、ございます……っ♡」

身体を少し動かすだけで、一晩中繋がったままの入り口がぐちゅ♡といやらしい水音を立てる。

「ふふ。私のモノを咥え込んだまま、すやすやと寝ている姿は本当に可愛らしいな……だが、そろそろ魔羅を抜いてあげよう」

チュッ♡と頬に甘いモーニングキスを落とされ、男の腰がゆっくりと後ろへ引かれた。

大きく膨張していた肉棒も一晩かけて少しだけ小さくなっていたものの、未だに柔肉をくにゅくにゅ♡と押し広げている。

ずぷっ……♡ずずずっ……♡

「あ、あぁっ……♡ぬけ、るぅっ……♡」

長時間、奥の奥までびったりと密着していた肉竿が、膣壁をねつとりと擦り上げながら引き抜かれていく。

ずるんっ！♡ぬっぽおっ……！！♡

「んひあぁっ！！♡♡」

一晩中、子宮の奥底にせき止められていた大量の白濁が、決壊し

たダムのようにドバババッ！♡と一気に溢れ出した。

どろろろっ……♡じゅわああっ……♡どぽぽっ……♡ドポポポ
……♡

「ああっ、だめっ……♡いっぱい、でてる……すごい量……っ♡」

「獣人の雄は皆こんなものだ。一回の交尾で、確実に自分の子を身籠らせるために大量の種を注ぐからな」

「えっ……じゃあ……」

避妊など一切していない。このままでは、私のお腹にお父様の子供が……？

獣人と人間の子供など聞いたこともないが、不安に揺れる私の瞳を見て、髪を梳かすように頭を優しく撫でてきた。

「安心していい。そもそも獣人のメスでも中々子どもができないのに、か弱い人間の身体では、獣人の赤ん坊は基本的に身籠ることは

ない」

「あつ……そう、なんですか……っ」

子どもを産むなんて考えてもいなかったから、少しだけほっと息を吐く。

すると彼は私の顎をくいっと持ち上げ、目を嗜虐的に細めた。

「なんだ、安心したような顔をして……私は少し残念なのだがね」

「あつ……うつ、ごめんなさい」

「だが、まあ……子どもを生むのは大変と聞かし、お前が子供にかかりきりになって私を見てくれなくなるのも腹立たしい……」

「おとう、さま……っ♡」

「お前は一生、私の可愛い娘として……ただ甘やかされて、毎晩こうして中出しされて、愛されていればいいんだ♡」

ぞくり♡と、背筋に甘い痺れが走る。

お腹の中から絶え間なく子種がこぼれ落ちる音を聞きながら、私は一生彼に飼われる事を宣言され、きゅんっ♡と子宮をときめかせた。

「……とはいえ、いつまでもそのまま、ドロドロに汚しておくわけにはいかないからな……綺麗にしようなっ♡」

ライアンが指を鳴らすと、ベッドの脇の木箱から、手のひらサイズの半透明な青いスライムがぽよんっと飛び出してきた。

「ひっ、またあのスライム……っ?」

「ああ。こいつがお前のおまんこのなかに残った私の子種を、一滴残らず吸い取ってくれるんだ♡」

青い塊が大きく開かれた股の間に這い寄る。

ぬちゅ……♡

冷たいゼリーのような感触が、一晩中の交尾で真っ赤に腫れ上がった敏感な入り口に触れた。

「ひあぁっ♡冷たっ、んんっ……♡」

ずちゅっ……♡ にゆるるるっ……♡

ぬるりと形を変え、触手のように細長く伸びて、白濁が絶え間なく溢れ出す牝穴の中へずるずると潜り込んでいく。

「あ、あぁっ♡は、いってくるうっ……♡」

熱を持った柔肉を押し広げながら侵入してくる。
ぐちゅっ♡ じゆるるるっ……♡ ちゅぽっ♡

膣内の奥までうねうねと入り込み、ねっとりとしこびりついた大量の種を絡め取るように吸い上げていく。

「んああっ♡や、ああっ♡そこ、こすれ、てっ……♡」

ゼリー状の冷たい粘体が、子宮口のあたりまで無遠慮に蠢き回る感触が、異常なほど気持ちいい。

ライアンの強烈な雄の匂いと精液に満たされていたナカが掻き回されるたびに、きゅんきゅんっ♡と子宮が甘く疼いてしまう。

「ふっ、随分と気持ちよさそうにスライムを受け入れているな♡種を掻き出されることすら快感に変換してしまうとは……本当に我が娘は可愛らしい……♡♡」

「ちがつ……ひぐっ……♡♡かってに、からだがあっ……♡♡♡♡」

ぬちゆるるっ♡
ずぼぼっ♡
じゅぷぷっ……♡

「あつ、あぁっ♡吸われてるっ、おく、きもちいいっ……♡♡」

ひんやりとした異物がぐじゅぐじゅ♡と動くたびに身体は官能的な刺激を拾ってしまう。

私のナカにあった白濁と愛液をやつはたっぷりと吸い込み、大きくなっていた。

じゅぽんっ！♡

「はあっ……はあっ……あ……っ♡」

いったん外へ吐き出されると、糸を引きながらベッドの上にとぷん♡と転がる。

すっかり綺麗になったはずの蜜壺に、ライアンが指先でスライムを摘まみ上げ、もう一度ぴとり♡と押し当てた。

「んあ……♡ナカ……ぬいてえ〜♡きれいになったから、もう……」

それでもまだ快楽の余韻が残る媚肉は嬉しげに差し込まれたゼリー状の塊を飲み込んだ。

「ダメだよ。エリサのおまんこは私の子種を受け入れる為にあるんだ。他の雄から守るためにも、簡単には抜けないようにしておかないとだめだろう？」

「そんなのっ……むりです！ずっとなんて、からだ、おかしくなっちゃう……♡♡」

昨日一日でも辛かったのにこれからずっと入れ続けなきゃいけないなんて考えるだけで恐ろしい。

「はあ……お父様の言う事が聞けないのかい？私がこんなに可愛がっ

てやってるのに我儘を通そうとするのか？……ああ、パパは悲しいぞ……」

「っ……あっ……ごめんなさい……」

ライアンの表情から、さっきまでの甘い笑みがずっと消え、優しくかった声は底冷えるほど冷たかった。

翡翠色の瞳から光が引いて奥にどろりとした暗さが差す。

（まただ……怖いよ……）

「わかればいいんだ……エリサはいい子だからね」

私を膝に座らせ、寝起きで乱れた髪を優しく撫でる。

でも、その瞳はまだ淀んだままだった。

「だけど……最初から素直になれなかったのは良くないぞ♡お前が

私の言葉の意味をちゃんと分かるように、お仕置きしないとな♡」

続きは本編で